

ディズニー映画『アラジン』の中のオリエンタリズム

07K042 宮川 滋

私は今回、レポートのテーマを選ぶにあたって自分の周りのオリエンタリズムについて述べようと思った。そこで、先生が授業のとき言っていた「ディズニー映画は大体オリエンタリズムが含まれている」といった旨の発言を思い出し、自分もそのような感覚には少なからず共感を覚えたので、それについて詳しく知るために実際にはどのようなところで、ディズニー映画にオリエンタリズムが用いられているか調べることにした。

今回、私がテーマとして選んだディズニー映画は1993年日本公開のアニメーション映画『アラジン』だ。イスラーム世界(?)が舞台になっているため、オリエンタリズムについて述べやすい作品だと思ったからだ。

ディズニー映画『アラジン』のストーリーは『千夜一夜物語(アラビアンナイト)』の『アラジンと魔法のランプ』を基にしたものといわれているが、『アラジンと魔法のランプ』はアラビア語の原本または写本は存在せず本来のアラビアンナイトには含まれない物語である。アラビアンナイトの訳者による創作なのか、なんらかの根拠ある文献をもとにした物語なのかは全く謎である。これは私見だが、少なくとも私が読んだバートン版『アラジンと魔法のランプ』にはなんらかのヨーロッパ人の意思が反映されているように思える。なぜならば、原作では物語の舞台は中国(シナ)となっているが物語の端々にイスラーム世界やアフリカと混同するような表現が出てくるからだ。アジア全体を一緒くたにしているような印象を私は受けた。そして、映画『アラジン』にいたっては、中国という設定は一切出てこずに、イスラーム世界を基にした荒唐無稽な架空世界が展開されている。私はここにまず、西洋文化によるオリエンタリズムを感じた。つまり、物語の舞台が中国であろうが、イスラームであろうが、同じアジア圏の国々であり、多少の書き換えはあっても物語や舞台設定に大きな差は出ないだろうということである。もし物語の舞台が西欧文化圏だったならば、そこには細かなディティールが存在しこんなにスムーズな書き換えは行われなかっただろう。

さて、映画『アラジン』の内容だが、この映画の冒頭に泥棒として暮らす主人公のアラジンがパンを盗んで街中を逃げ回るシーンがあるが、このときに描かれている街や、そこに暮らす人々の様子が、この映画のイスラームに対する誤解を象徴しているように思う。どのようなものかという、例えばアラジンが若い女性達のいる部屋に逃げ込むシーンがあるのだが、このとき出てくる女性の服装がヴェールはつけているものの、肌の露出度は高く、口の周りを覆ったマスクはシースルーであまり意味をなしていない。実際のムスリマの服装は、国や地域によって差はあるものの基本的に男性の視線(性的感心)などから女性を守るために、全身を覆い隠す形になっているものが多い。また、顔の周りを覆うタイプの服装をしているムスリマは上記の理由から文字通り他人の目から顔を隠すためにヴェールをつけているので、シースルーであっては本来の意味をなしていない。それから、そのあとのシーンで火の上で座禅を組んだり、針の上で寝たり、剣を飲み込んだりして苦行(?)を行う人達のところを通り過ぎるシーンがあるのだが、こういった行為は、実際のイスラームでは行われていない。こういった苦行のイメージの基となったイスラームの文化としては「六信五行」が挙げられるだろう。これは、ムスリム、ムスリマが信じなければならない六つのことと、行わなければならない五つのことを指しているのだが、これに含まれる断食(ラマダーン)などのイメー

ジによりイスラーム教の厳格なイメージが先行し、無理な苦行などの間違っただけの認識が生まれたものだと思う。(実際のラマダーンは一種のお祭りのような感覚でムスリム、ムスリマにとっては意外に楽しいものらしい。)

このディズニー映画『アラジン』のストーリーは全体を通して、貧乏人のアラジンが魔法のランプの精の力を借りて王国の王女とやがて結婚するという原作のストーリーを踏襲しているもののそこに実に巧妙に、しかもおそらく無意識的にイスラームを見下し、アメリカ的な自由主義を称賛するようなプロパガンダ的なものが織り交ぜられている気がしてならない。

この物語のヒロインである王女ジャスミン(彼女もまた露出の高い服を着ていて、ヴェールも着けていない)は、いつも自由にあこがれ、宮殿での暮らしに飽きあきしている。父である王が決めた見合いの相手もいつも追いついてはばかりいる。これは、原作にはなく映画で描き加えられた描写だが、ここで気になるのはジャスミンの自由(自由恋愛)への憧れがとて強調されている点である。こんなシーンがある。ジャスミンが見合いの相手を断ったあとに、王がジャスミンに詰め寄り「次の誕生日までにお前は結婚するのじゃ、法律でそう決まっておるのじゃ」と説教をするが、ジャスミンは「法律が間違っているわ」と軽々と言い放つ。これは、政教一致の観念を持つイスラーム世界において暗にイスラーム法ひいてはコーランに書いてあることは「間違っている」もしくは「近代的でない」という意識が読み取れるように思う。さらに、そのあとジャスミンが籠の中にいる小鳥たちを空に開け放つシーンがあるのだが、このシーンも「自由」へのあこがれを強調しているように思う。つまり、籠(イスラームの規範、法)の中に閉じ込められている小鳥(ジャスミン)を解放してくれる何かを求めていることが暗示されている。そして、そのあとジャスミン王女は城を抜け出し市場で主人公のアラジンと出会う。しかし、悪役のジャファールの策略によりアラジンは捕まってしまう、そこから紆余曲折を経て、魔法のランプを手に入れたアラジンは、ランプの精ジーニーの協力を得ながら、王女ジャスミンにせまり、ジャファールの謀略をやぶって、最終的に王女ジャスミンと結ばれる。そして、最後にはランプの精を自由にしてやって、皆ハッピーエンドでエンディングを迎える。

この映画で繰り返し謳われているのは、自由への憧れであり、そこにはアメリカ的なグローバルスタンダードな価値観が反映されているだろう。そしてその対極として描かれているのが法律や規律、ルールといったもので主人公たちはそれらに立ち向かい自由を勝ち取っていき、皆幸せになる。ラストシーンの王のセリフでこんなセリフがある。「間違っているのはあの法律じゃ。」これは、王子でないアラジンと娘との結婚を認めるために言ったセリフだが、イスラームの世界ではこのセリフはあり得ない。

このように、この映画は西欧的なグローバルスタンダードの視点、価値観でイスラーム世界を描いているので、非常に奇妙な架空世界を描く結果となっている。逆に言えば、それは西欧にとって、都合のよい架空世界を描くことによって、オリエンタリズムを利用し、西欧にとって不可思議なイスラーム世界を体験したような錯覚を抱かせ、かつ自分達の価値観を肯定してくれる、西欧の人達にとって非常に気持ちのいい、都合のいい「エンターテインメント」作品に仕上がっている。しかし、それによって、イスラームに対する誤解(非近代的、西欧の価値観に比べ劣っているなど)が生まれることは避けられないだろう。

参考文献

加藤 博 編集『イスラームの性と文化』東京大学出版会、2005

臼井 陽 『イスラームの近代を読み直す』毎日新聞社、2001

加藤 博 『イスラーム世界論：トリックスターとしての神』東京大学出版会、2002

バートン版 山主敏子 編訳 『アラビアンナイト1 アラジンと魔法のランプ』ぎょうせい、1900

参考URL

ウィキペディア アラジンと魔法のランプ

<http://ja.wikipedia.org/wiki/アラジンと魔法のランプ>

(2010年7月27日アクセス)

イスラーム教の特徴

<http://www.geocities.jp/timeway/kougi-44.html>

(2010年7月27日アクセス)

ウィキペディア アラジン (映画)

[http://ja.wikipedia.org/wiki/アラジン \(映画\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/アラジン_(映画))

(2010年7月27日アクセス)

(担当教員 松本 ますみ)